

2009年8月14日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

予想を上回るユーロ圏GDPを好感

欧州では、ドイツとフランスの4-6月期GDPがプラス成長となったことが好感されて、株式相場は続伸しました。4-6月期ユーロ圏GDPは前期比▲0.1%と前期(同▲2.5%)より大幅に改善し、市場予想(同▲0.5%)を上回りました。ドイツが前期比+0.3%(予想は▲0.2%)、フランスは+0.3%(同▲0.3%)と予想外のプラスに転じたことが大幅改善の背景です。ただし、主にプラスに寄与したのは、自動車買い替え促進策による自動車販売の増加や、輸出以上に輸入が低迷したことによる純輸出の増加などの特殊要因でした。ユーロ圏景気の縮小ペースは減速してきており、最悪期は脱したとの見方が広がりつつありますが、雇用環境など先行き不透明な要素も多く、急速な景気回復を期待するのはまだ時期尚早のように思われます。

米国市場では、予想を下回る米小売売上高を受けて個人消費回復に対する懸念が高まり、米ドルや金利は低下しました。金利低下の背景には30年債入札の需要が好調だったことも一因でした。一方、株式相場は小売大手の好決算などの好材料に支えられて続伸し、年初来高値を更新しました。7月の米小売売上高は前月比▲0.1%、自動車を除いたベースで同▲0.6%と、プラスの市場予想(それぞれ同+0.8%、+0.1%)に対して予想外のマイナスとなりました。減少は3ヶ月ぶりです。政府による自動車買い替え奨励策を受けて自動車は好調でしたが、その他の部門はマイナスが目立ちました。自動車に関しても需要の先取りに過ぎないとの見方もあり、今後も持続するかどうかは不透明です。雇用環境悪化を背景に米個人消費が依然として弱いことが窺えます。

景気敏感株が上昇を牽引

国内株式市場は、世界的な景気回復期待を背景に、景気敏感株中心に堅調な展開となりました。中でも、アナリストが投資判断を引き上げた機械株や大手商社株が相場上昇を牽引しました。機械株の投資判断引き上げは、新興国での需要拡大が背景となっており、機械株指数は年初来高値を更新し、TOPIXの上昇率の寄与度でトップでした。また、世界的な需要回復期待から海外市場で銅やニッケル、原油などの商品市場が軒並み上昇したことを好感し、資源関連株が全般的に堅調でした。一方、投資判断引き下げを受けたゴムや4-6月期決算で赤字幅が前年同期比で拡大した保険株など、悪材料が出た銘柄は軟調でした。結局、日経平均株価は年初来高値を更新し、昨年10月3日以来の高値水準となりましたが、東証一部上場銘柄のうち、3割以上は値下がりしており、全面高には至りませんでした。

本日は新興国市場に関連する投資信託の設定があり、中国インド関連株の投信に300億円弱、新興国の内需拡大を背景としたインフラ・消費関連企業に投資するグローバル株式投信に450億円程度集まりました。為替市場では円売り材料となりますが、日本の株式市場への影響は軽微にとどまると思われれます。個人投資家の関心が、より高い成長が見込まれる新興国へと向かっている様子が感じられます。

世界的に景気回復期待が高まる中で、株式相場は世界的に堅調な展開が続いています。ユーロ圏の予想を上回る成長率は、投資家心理を好転させる一因となりました。ただし、米個人消費は依然として弱く、今後は実体経済の回復を慎重に見極めていく必要があるのではないかと考えられます。

以上